



誰もが
生きがい・役割を
感じられる社会に

表現活動を通じた福福連携事業実施報告書



令和2年度 文化庁：文化芸術収益力強化事業
博物館等における「新しい関係性の構築」による収益確保・強化事業
株式会社乃村工藝社
社会福祉法人みんなでいきる

1

表現活動を通じた福祉連携事業について

日本における高齢福祉事業所（以下施設とします）では、日中の活動として様々なレクリエーションが実施されています。簡単な計算や身体を動かしたり発声することで、脳機能や身体的機能の維持を図っています。しかしながら、昨今の新型コロナウイルスの流行により利用者同士の接触は感染リスクが高くなってしまいました。あわせて、冬期間は新型コロナウイルスに関わらずインフルエンザやノロウイルスなどの感染リスクも高まります。このことから、利用者同士の接触を極力避けつつも施設における日中活動に何か刺激となるプログラムを開発できないかと考えました。

その中で生まれたのが絵画の鑑賞プログラムです。これまでも施設ではぬりえやカラオケなどの文化プログラムはありましたが、絵画を鑑賞するという機会はあまりありませんでした。今回プログラムを受けた利用者への事前調査によると施設を利用する前もほとんどの方が絵画などを鑑賞したことはありませんでした。

絵画の鑑賞という新しいプログラムを実施することで、何か利用者の日常生活が豊かになる一助となることがないか。その効果を実証実験を通じて検証するのが今回の事業の目的です。

今回の鑑賞プログラムに使用する作品は、新潟県内の障害のある方の作品です。障害のある方の作品の中には、作家の情動をあるがままに表現していたり、それぞれの感覚や見えたこと・感じたことが如実に表れているものがあります。そうした作品は高齢者の感情や記憶に何か作用するものがあるのではないかという仮説をもとに、障害のある方の作品を使用することにしました。



これまでの文化プログラム



社会福祉法人みんなできる



株式会社リ・プラス

2

実施体制

社会福祉法人みんなできるとおよび株式会社リ・プラスの2社で協働プログラムを実施しました。役割分担は、みんなできるとが事業コンテンツの企画や作家との調整を行い、リ・プラスがプログラム参加者の調整や会場の環境を整備しました。また、作品の選定にあたって新潟市美術館館長の前山裕司氏より監修を受けました。

社会福祉法人みんなできると

〒943-0834

新潟県上越市西城町 2-10-25 大島ビル 307

TEL:025-530-7264 FAX:025-530-7261

株式会社リ・プラス

〒953-0012

新潟県新潟市西蒲区越前浜 5151

TEL:0256-77-2077 FAX:0256-78-7379

3

実施内容

プログラムの実施にあたっては、利用者の命を守る観点から感染症リスクを極力なくした内容で実施することにしました。高齢者は感染症の罹患が、命に係わる重大な事態につながるケースもあり感染症防止は最も留意しました。

よって、プログラムの内容は制限されますが、①事業所内でスタッフによる鑑賞会および②事業所内でオンラインによる外部講師による鑑賞会の2パターンを併用して実施することになりました。プログラムは全てリ・プラスのデイサービスもしくはサービス付き高齢者住宅内で実施しました。オフラインでは作品そのもの、オンラインでは作品そのものとデータでの鑑賞会を行いました。

プログラムの内容は少人数でかつ1回の時間を上限30分に制限して実施しました。開催時間は睡魔に襲われやすい昼食後の14:00開始に固定しました。これは感染症対策だけでなく、利用者の体力や判断力、身体的な状態および日中の過ごし方に変化を与えることを考慮し設定しました。従来のケアプランを基礎資料に、リ・プラスの職員が改めて表現活動の興味の有無を含めて利用者の状態を確認しました。

プログラム実施後は、当日の16:30頃、翌日の午前8:00頃に受講者の様子を確認し記憶が残っているか確認しました。あわせて、効果が見られる方には連続してプログラムを実施しました。

なおリ・プラスの利用者の年齢層が50代後半～90歳後半という幅が広く、要支援1～要介護3と心身の状態像も多様であったことから画一的ではなく個別の対応を行いました。

実施にあたっての
14の
キーワード

- 1回30分まで
- 少人数で(1～8名)
- 50代後半～90代後半
- 14:00スタート
- プログラム後の確認
- 要支援1～要介護3
- オフラインとオンライン
- 現物とデータ
- 体力の見極め
- 判断力の見極め
- 聴覚の見極め
- 視覚の見極め
- 経験の見極め
- 関係性の見極め

【実施方法】

実施方法	感染リスク
事業所外で鑑賞	高い
事業所内で外部講師が実施	高い
事業所内でスタッフが実施	低い
事業所内でオンラインで実施	低い



4

スケジュール

日 時	内 容
2020 年	
12 月 30 日 (水)	事業事前打ち合わせ
2021 年	
1 月 7 日 (木)	オフライン 参加者 3 名
1 月 11 日 (月 祝)	オフライン 参加者 4 名
1 月 12 日 (火)	オフライン 参加者 4 名
1 月 13 日 (水)	オフライン 参加者 4 名
1 月 14 日 (木)	オフライン 参加者 4 名
1 月 18 日 (月)	オンライン 参加者 4 名
1 月 20 日 (水)	オンライン 参加者 4 名
1 月 23 日 (土)	オフライン 参加者 3 名
1 月 25 日 (月)	オフライン 参加者 3 名
1 月 27 日 (水)	オフライン 参加者 3 名
1 月 29 日 (金)	オフライン 参加者 4 名
2 月 2 日 (火)	オフライン 参加者 4 名
2 月 3 日 (水)	監修者打ち合わせ
2 月 6 日 (土)	オンライン 参加者 3 名
2 月 10 日 (水)	オフライン 参加者 5 名
2 月 14 日 (日)	オフライン 参加者 8 名
2 月 17 日 (水)	オンライン 参加者 3 名
2 月 18 日 (木)	オンライン 参加者 3 名
2 月 22 日 (月)	オンライン 参加者 2 名
2 月 25 日 (木)	オンライン 参加者 3 名
3 月 1 日 (月)	オンライン 参加者 3 名
3 月 2 日 (火)	オフライン 参加者 6 名
3 月 3 日 (水)	オンライン 参加者 3 名
3 月 4 日 (木)	オンライン 参加者 3 名 事業終了
3 月 5 日 (金) ～	報告書の作成 追加プログラム

対象者の状態は表のとおりです。

	性別	年齢	要介護度	コミュニケーション
1	F	70 代	要介護 3	コミュニケーションに特に問題はなし。
2	M	80 代	要介護 1	難聴と認知症のため噛み砕いた内容であればコミュニケーション可能。文字や絵がそもそも分からない可能性高い。
3	M	80 代	要介護 2	やや難聴。コミュニケーションに問題はなし
4	F	60 代	要介護 3	知的障害あり。難しい言葉は理解できない事が多い。集中力が低い。
5	F	80 代	要介護 2	強い認知症はあるが、受け答えははっきりしている。
6	F	80 代	要介護 2	強い認知症はあるが、受け答えははっきりしている。
7	M	50 代	要介護 2	脳疾患に伴い言葉は十分に理解しているが、発語にかなり時間がかかる。
8	F	80 代	要支援 2	やや難聴。多弁なので鑑賞の際は一人もしくは二人が良い。
9	F	80 代	要介護 1	難聴あり、少し噛み砕いた内容だとより理解しやすい様子
10	M	80 代	要介護 2	認知症強く、「なんだかわからない」との回答が多い。クローズドクエスションから対話を始めるのが良い
11	F	70 代	要介護 2	コミュニケーションに特に問題はなし。
12	M	80 代	要介護 1	コミュニケーションに特に問題はない。
13	M	80 代	要介護 2	少し噛み砕いた内容の方が理解してしやすい可能性
14	F	80 代	要介護 2	コミュニケーションに問題はなし。
15	M	80 代	要介護 1	話が聞き取りづらい
16	M	70 代	要介護 3	入院中
17	M	70 代	要介護 3	知的障害あり。集中力が低い。話を噛み砕き、ご本人に集中できるような場面を作る必要あり。
18	F	80 代	要介護 1	難聴あり。一方通行のコミュニケーションになる事が多く。かなり噛み砕いた内容にしないと理解できないこと多し。
19	F	70 代	要介護 1	やや難聴。興味のないものには一切反応しない。
20	F	70 代	要介護 1	コミュニケーションに問題はなし。
21	F	80 代	要介護 3	コミュニケーションに問題はなし。
22	F	90 代	要介護 1	コミュニケーションに問題はないが、zoom 画面を理解できるか？
23	F	80 代	要介護 2	コミュニケーションに問題はない。
24	M	80 代	要介護 2	言葉は問題なく理解できるが、発語に少し時間がかかるかも。
25	M	70 代	要介護 1	やや難聴だが、コミュニケーションに問題はなし。

5

対象者



2021年1月8日(金)より降り続いた豪雪によりみんなできいのスタッフの身動きが取れなくなりました。1月下旬まで交通渋滞が続いたことに加え、事業担当者の車両が雪の重みで故障し、修復に1カ月半を要しました。このことにより、作品の搬入や作家へのデータ借用の手続きに影響がでました。

6

アクセシ
デント

当初、作品のデータを借用するためには作家宅もしくは利用している施設に訪問し交渉する予定でした。事業担当者の車両が故障したことにより、作家への訪問が困難となり社会福祉法人ロングランおよび障害のある方の絵画のリース事業を行っているまちごと美術館を通じて大多数の作家のデータを借用しました。

7

データ
の借用

8

作品

新潟県内の21名106点の作品の現物およびデータを借用しました。抽象的なものから、風景・人物など様々な作品を集めました。借用した作家名と代表作品は右欄のとおりです。

9

動画
制作

新潟県内の3作家および1事業所の動画を作成しました。利用者に伝わるよう効果音やアニメーション、また場所などの情報が分かるように編集しました。動画時間はおおむね4分と短めにし集中力が持続するよう工夫しました。

【絵画】

① しゅんすけ	パズル④、海月	計3点
② 小田 潤	はっけよい、稲刈り幸子	計3点
③ 新井 里沙	ガーベラ、とき	計3点
④ 石栗 仁之	難崖富士山、ブルーバード	計3点
⑤ 石川 武	ベトナムの思い出、長岡花火	計3点
⑥ 大森 真奈	無題	計2点
⑦ 竹内 栄二	とうもろこし・すいか・笹団子	計2点
⑧ 塚田 修二	帰り道、馬頭観音	計3点
⑨ 田中 勝彦	無題	計2点
⑩ 田中 翠恵	令和の動物パズル①	計2点

⑪ 齋藤 誠	無題	計2点
⑫ 前田 優作	無題	計2点
⑬ 木間 康夫	無題	計2点
⑭ 堀井 銀次	チューバ、バイク等	計12点
⑮ 西須 奈津子	ライオン、キリン等	計12点
⑯ 山崎 祥吾	たいやき、アマビエ	計2点
⑰ 星野 和也	ムンク?、モネ?等	計4点
⑱ 大橋 加奈	長靴を履いた猫等	計4点
⑲ 長谷川 あ久里	夕陽等	計21点
⑳ 新井 里沙	無題	計8点
㉑ 嵯峨谷 正敏	無題	計11点



【動画】

- ・アートキャンプ新潟
- ・堀井 銀次
- ・西須 奈津子
- ・長谷川 あ久里

10

オフラインでの実施

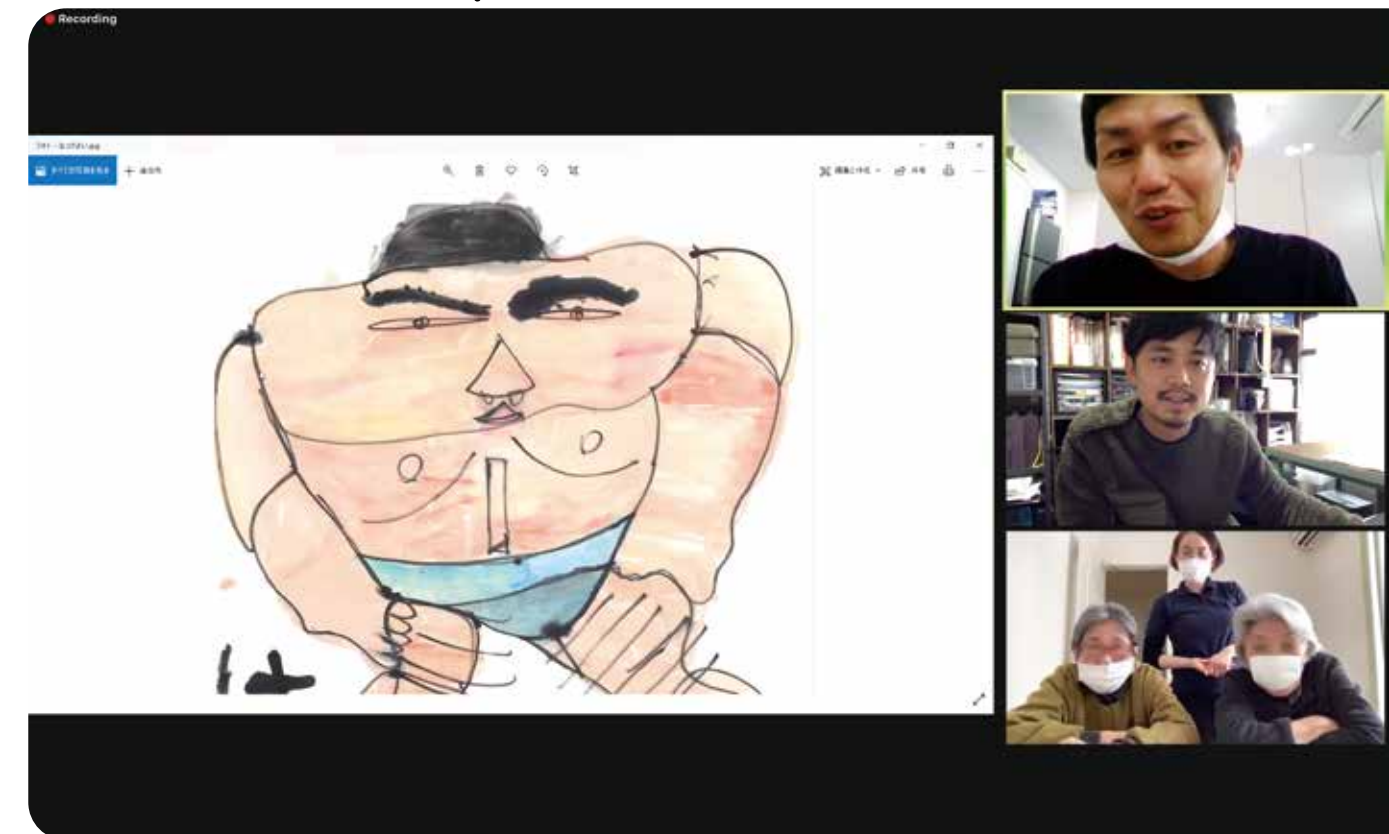
リ・プラスのデイサービスもしくはサービス付き高齢者住宅内で延べ13回実施しました。デイサービスがオープンなスペース、サービス付き高齢者住宅が最大定員3名の小部屋でした。リ・プラスのスタッフが利用者の状態像の確認も兼ねて鑑賞会の進行を行いました。定員は1～8名で、デイサービスと小部屋を使い分けて反応を把握しました。



11

オンラインでの実施

オンラインのツールはzoomを使用し、画像共有によるデータの投影とリ・プラスに事前に搬入した絵画の解説を行いました。絵画の鑑賞に入る前に音声の感受のチェック、色の認識度、当日食べた昼食など記憶力のチェックを行いました。おおむねコミュニケーションの時間を15分、鑑賞の時間を15分と設定し実施しました。



【成果】

- ・当初の狙いであった、施設を利用する認知症高齢者の日中活動のプログラムの開発には成功したと思われます。対象者によって反応の濃淡はありましたが、絵画を介したコミュニケーション、また絵画を通じて記憶を想起したり、物事を考える場面が見られました。また絵画の鑑賞から絵にまつわるストーリーを想像する方もいました。
- ・ほとんど利用者が、施設利用に関わらず美術館など絵を観に行く機会がありませんでした。絵の鑑賞会を行うこと自体が新鮮な経験であったと考えられます。鑑賞会を機に新たな画材で絵を描いてみたいという方や、折り紙を折ってみたいという方もいました。
- ・年齢や認知症の症状を考慮すると、絵画の鑑賞は難しいのではと思っていた方も、1回30分という時間と分かりやすい声掛けによって色を識別したり絵画のモチーフが何かを認識していました。
- ・介護支援専門員やスタッフから、事前に利用者の心身の状態や生い立ちなどの情報を得て、興味のありそうな絵画を事前に選定することができました。また、利用者への文化活動に関わるヒアリングを通じて、今まで知りえなかった地域の風習や過去の日常生活の様子を把握することができました。

オフライン

【課題】

- ・スタッフが鑑賞会を何度か実施したところ、大人数になればなるほど意思伝達が難しくなり、また聴覚・視覚による認識が難しくなることが分かりました。
- ・身体的な機能が維持されており判断力が高い方であっても、個別の説明が必要であり集団での鑑賞会の難しさを感じました。最大で1回の鑑賞者は5名が限度でした。最大8名の鑑賞会を実施しましたが、距離感や音の感受の問題でコミュニケーションをとることが困難でした。特に音はスピーカーの音を大きくしても地声もしくは、耳元で話さないと聴こえない方がおられ課題となりました。またスピーカーの音量を大きくすればするほど音の感受の良い方にとっては騒音となり不快な思いを与えてしまいました。
- ・絵画を見て、考えたり記憶を想起する場合もあれば、色によりPTSDのフラッシュバックが起こることもありました。例えば赤色を観た時に、過去に身体的虐待を受けていた記憶が蘇ってしまった方もいました。あらゆる事態を想定して、プログラムを実施することと事前に対象者の情報を整理する必要性を感じました。

【改善点】

- ・デイサービスのフロアは感染症予防としては換気の面で適した空間でしたが、大多数の方にプログラムの内容が伝わらなかったことから小部屋中心でのプログラムに切り替えました。
- ・オフラインでの実施状況を踏まえ、オンラインでは開催した全10回のうち9回を小部屋で実施しました。1回の参加者は2名を限度にしました。

【成果】

- ・利用者にとってオンラインでのコミュニケーション自体が初めての経験であり、そのやり取りが楽しかった様子が伺えました。絵画の鑑賞だけでなく、歌を歌いだしたり生い立ちを語り出したり良い刺激を与えられたと考えています。
- ・14:00開始と昼食後の睡魔に襲われやすい時間にあえて開催しましたが、1回あたり概ね30分ということもあり居眠りする方は一人もいませんでした。集中力をもってプログラムに参加してくれました。複数回プログラムを受講した対象者は、プログラムを受講したことを多少覚えており、鑑賞会を連続して実施することで記憶の積み重ねができました。
- ・動画は想定以上に楽しまれていました。実際に作家が作品を制作している場面に興味を示していました。
- ・実際のキャンバスを見ることで、どのように絵の具が使われているかを知りかつて自分も絵を描いていたと初めて教えてくれる方や、普段使わないアクリル絵の具を使って描いてみたい、など「絵を描く」という行為に自体に興味を持ってくれる方もいました。

オンライン

【課題】

- ・絵画のデータでは作品の質感や素材感が伝わらず、現物の方が反応が良かったです。
- ・オフライン以上に弱視・難聴の方へのアプローチに難しさがありました。高齢者の弱視・難聴は後天性の方がケースが多く、字幕や手話での対応が困難です。色の認識も難しい方がおられ、そのことも含め絵画の説明力が問われました。
- ・動画の作家や作品の説明部分については、理解できる方が少なかったです。
- ・「この作品を観てどう感じましたか?」という、回答の幅が広い質問への受けごたえは難しい方が多かったです。当初は絵を見た率直な感想を聴きたかったのですが、答えられる方は少なかったです。「これは何の絵ですか?」「この絵は何色ですか?」といったクイズ形式での問いへの回答は多く、クローズドクエッションから会話をつくっていくスキルが必要でした。
- ・利用者は概ね鑑賞会は楽しんでいましたが、障害のある方の作品のクオリティや魅力が作用し楽しめたのかは定かではありません。他の作品群と比較する必要がありました。
- ・障害のある方の作品の中には、創作の過程の説明を要するものも多く利用者が説明を理解できないケースがありました。また抽象的な作品の反応は薄かったです。
- ・利用者と中継先のファシリテーターだけでのコミュニケーションは難しく、現地での媒介者・通訳として介護員の同行は必須でした。

【改善点】

- ・食べ物や人物、風景など分かりやすい作品を使用することにしました。

- ・ アクリル絵の具で絵を描いてみたいと思います。
- ・ とても緊張しました。
- ・ これで終わりなの？また会いましょう。
- ・ これはテレビなの？こういうの苦手だわ。
- ・ 初恋を思い出しました。その人はもういないけど。ラブレターは中学生の時に初めて書いた。
- ・ 何やったかは覚えていないけど、画面に写っている人とこの前話したのは覚えている。
- ・ 今度は食べ物の絵をみたいです。ラーメンが好きです。
- ・ 今、上越から話をしているんですか？上越の西城町に親戚が住んでいました。
- ・ 絵より歌が好きです。特に三船和子の他人船がいいです。
- ・ この絵は5万円もするんですか？買わないです。
- ・ 3時間で書きちゃうのか。凄いね。
- ・ 私はね83歳。昭和6年生まれ。89歳か。
- ・ 堀川さん(女性スタッフ)と一緒に、絵も観れるね。この絵のモデルは堀川さんだね。
- ・ 『しまむら』って看板がある。服を買いに行ったことある。巻のしまむらでしょ。
- ・ 赤色は怖いです。血が流れている。
- ・ ネコかね。ネコだ。

『しまむら』って看板がある。服を買いに行ったことある。巻のしまむらでしょ。



3時間で書きちゃうのか。凄いね。

あんたのこと？覚えてるわね。
今度甥っ子とテレビ電話するんだ。
甥っ子はあんたぐらいの年かな。

何をされるの。
絵はいりません。
お金は払いません。怖い。
嫌です。ごめなさい。

これはテレビなの？
こういうの苦手だわ。



- ・ 何をされるの。絵はいりません。お金は払いません。怖い。嫌です。ごめなさい。
- ・ 遊んでばかりいて申し訳ございません。もう嫌です。
- ・ この絵が何かって？わからんね。女の人かね？何色か？わからんね。
- ・ 生まれは東京の池袋。俺は東京生まれだった。池袋だよ。
- ・ しまむらだね。服が安い。
- ・ この絵はカニかな。このはさみみたいなのが。朱鷺かね。びっくりだわ。
- ・ ネコが好き。色は赤も好きだけど、ピンクが一番好き。お部屋もピンク色。
- ・ この絵は女優じゃないかな。若いって感じはしないね。スカーレット・オハラ？誰だろう？
- ・ この女の方はシャボン玉を吹いているね。
- ・ この女の方は煙草を吸っているね。私の時代だと煙草なんてとんでもない。
- ・ あの絵の女の方はだれだったんだろう？分からないな。
- ・ あんたのこと？覚えてるわね。今度甥っ子とテレビ電話するんだ。甥っ子はあんたぐらいの年かな。
- ・ 女性の絵がいいね。男は見たくない。
- ・ これは山からくる水を貯めている池だな。瓦屋根が新しい。
- ・ 昔、絵を描いたてたんだよ。風景がだね。動物や人物は描かない。
- ・ 絵の具があれば絵を描きたい。絵の具のお金は払いたくない。
- ・ しまむら。服を買いに行った。しまむら、楽しいです。
- ・ この絵はニワトリ。うちの集落はニワトリの神様を祭っている。昔は卵を食べると神社に謝りにいった。今は、ニワトリも卵も平気で食べます。
- ・ しまむらは行ったことがある。服がいっぱいあって楽しい。

アクリル絵の具で絵を描いて
みたいと思います。

この絵はニワトリ。うちの集落はニワトリ
の神様を祭っている。昔は卵を食べると神
社に謝りにいった。今は、ニワトリも卵も
平気で食べます。



この絵はカニかな。このはさみみたい
なのが。朱鷺かね。びっくりだわ。

この絵は5万円もするんですか？
買わないです。

前山裕司氏（新潟市美術館館長）

監修ということを考えると対象者の反応を見てプログラムの効果を図るためには、同一人物に繰り返しプログラムを体験してもらうなど強度が必要だと感じた。対象者が高齢かつ認知症を発症していることを考慮すると、単発的な絵画の観覧ではその場での感情の起伏など効果が認められるかもしれないが、その後の日常生活における変化を図るのは難しいのではと考える。中長期的にプログラムをこまめに実施することで、残る記憶・残らない記憶などを個々に整理し、効果の法則性などを発見することができるのではと思う。

今回は最大で、5回プログラムを受けた方がおられ、その方は全てではないが観覧した絵画やファシリテーターの記憶が少しずつ蓄積され、コミュニケーションが円滑になった。また、自ら絵画を描きだすなど表現活動にもつながった。こうした事例を一層積み上げることで福福連携事業を一層社会に周知することができるのではないかな。

加えて、一緒に焼き物を作ったりアール・ブリュット作品以外の作品の観覧など、文化プログラムをもっと試してみることを提案したい。今回の対象者は絵画よりも歌が好きという方が多く、絵画には興味がないという状態であった。実際に絵画を見せてみると喜ぶ方も多く、単に美術作品との接点が今までなかったという方が大半だった。こうした状況を考えると、高齢者施設においては、文化プログラムを限定するのではなく、様々な取り組みにチャレンジしていくことが肝要と思われる。

冬期間での今回のプログラムの高齢者施設での実施は新型コロナウイルスに限らず、インフルエンザやノロウイルスなどの感染リスクがあります。高齢者は感染症の罹患が命に係わることも多く、外部を交えたプログラムは基本的には望ましくありません。

半面、冬期間は高齢者が外出する機会が極端に減ることから心身の機能が低下するおそれがあります。オンラインでのプログラムを昇華することによって外部との接点や新たな刺激を与えることで、これまでになかった高齢者施設でのレク活動に寄与できるのではと考えます。

またコロナ禍で、発表や販売の機会が減少している障害のある方の作品を鑑賞会に用いることで、発表の機会の創出や収入の確保につながる可能性もあります。何より、作品の鑑賞を通じて高齢者の日常生活の豊かさの向上に寄与できたなら、障害のある方の新たな活動の場を見出すきっかけになるかもしれません。

介護の視点で今回のプログラムを考えてみます。今回プログラムを実施したり・プラスの職員からは、認知症の症状であるすぐに忘れる・同じことを繰り返すといわば問題行動が、絵画の鑑賞を通じてその行為をみると『繰り返し絵を褒める』『絵を通じて昔の話を職員に教える』という価値や役割の転換が起った場面に気づいたと話がありました。介護職員がこのような視点を持つことで、高齢者施設自体が文化施設としての側面も発揮する可能性が見えてきました。介護施設のスタッフの利用者と向き合う姿勢にも変化がみられたことは付随的ではありますが大きな成果でした。鑑賞会を通じて、利用者が繰り返す同じ言葉や行動をこれまでの個々の生き方を表現している表現なのではないかと新たな視点を得た職員もいました。

利用者は認知症の症状を介して、全力で自身の表現を発信しているのではないかな。こうした価値観の転換が介護現場で起こった時に、もしかしたら現在叫ばれている介護人材不足の解消にもつながるのではないかなと思います。

当初は認知症高齢者への鑑賞会の有用性があるか、疑問を感じつつのプログラムの実施でした。少なくともリ・プラスの利用者における効果は個人差はあれど想定以上にあったと考えます。オンラインツールも、利用者の日常生活を豊かにする新たなコミュニケーションツールになりえることが分かりました。

新潟県においては今後も、今回のプログラムの実施を重ね多くの事例を積み上げた実証結果を示したいと思います。

事業終了後に、試験的に精神疾患がある方にファシリテーターを務めてもらいました。この方は、みんなでききに年間の電話 300 件、電話時間 9,000 分、メール 100 通の相談を寄せられていて語ることに時間とエネルギーを割いています。誰かに話を聴いてもらいたいという願望は留まることがなく、大きな声と凄い勢いで新潟県内の様々な相談機関に電話をかけています。

今回、そうした語る相手がほしいというニーズと話し相手がほしいというニーズを鑑賞会を通じて引き合わせてみました。ただでさえ慣れないオンラインでのやり取りに、コミュニケーションの齟齬が発生しないか不安でしたがとてもスムーズなやり取りが行われました。

大きな声で途切れなく続く会話に高齢者の方も様々な反応を示し、あっという間に 30 分が過ぎました。精神疾患がある方も、プログラム終了後の達成感を口にし、次回はもっと分かりやすく話したいなど反省点も述べていました。

このことから、マイナスのポイントで語られる福祉的なニーズを掛け算することでプラスに転じる可能性を感じました。困っている方同士を絵画の鑑賞がつなげ、より良い関係性をつくっていく。語り手と聴き手という関係からも福福連携の可能性を感じました。



